

13
5
95

新年の佛法

明治二十二年一月刊行

(非賣品)

福島同和會有志出版

015852-000-7

特16-647

新年の佛法

福島同和会

M22. 1

ABC-1609



No 14726

新年の詞

去年の臘月三十一日と今年の一月一日と天地萬物果して何の差異かある仰ひて天日

と觀るに毫も差異なく去日も明くとして照臨し今日も明くとして照臨し新舊の故を

以て光明一點も増減なし俯して大地を觀るも亦た毫厘の差異あらす去日も堅牢よし

我と載せ今日も堅牢よし我と載せ新舊の故と以て少かも其性梅と變異せず屋後

の松竹庭前の梅花より以て門外の狗吠爐邊の睡猫に至るまで未だ物も新舊の故と

以て其體用を去今の間も變するものあると見す其れ然り然るも吾人人間の分野に至

りてい也た太た如上の差異なきに似す去日の萬事も匆くとして東西に馳せ南北に走

り富者の富の故と以ていそがしく貧者の貧きの故を以て忙しく愚夫もいそがしく

く智者もいそがしく王公もいそがしく奴婢もいそがしく屋後松竹あれとも其翠

と愛するを知らず庭前梅花の發くるゆるも折て瓶裏に挿さむの暇なく唯劇卒として

驅逐よ疲れ夜以て日は繼ぎ須臾も休む時あし然るも今日の全く之よ反して萬事悠々

として到るところ笑語あたるか富者の富の故と以て優かに貧者も其身の貧きと忘



れたるか如く王公も奴婢も皆その所を得て千家萬家ことごとく祝賀の聲と聞く然れ
 の屋後の松竹庭前の梅花其色舊年のものよ非ざるか如く韶光佳氣洋洋として天地よ
 瀟沓門外の狗吠爐邊の睡猫亦復しかり悉く皆新禱と祝し淑景を迎ふるものよ似たり
 噫それ去年の臘月三十一日と今年の一月一日畢竟何等の隔りありて差異此の如きの
 甚だしきと見るや其兩日相隔りたるの時節と知らんと欲するよ一異微細決して辨明
 すべからず試みよ思へ去年の臘月三十一日午後十二時と過ぎ今年一月一日午前零時
 よ至るの間を以て果して兩日相隔りたるの時間とあす平實に是れ一異微細決して辨
 明すべからざるあり此一異辨明すべからざるの微細ある時間と於て何者か能く此兩
 日閑忙差異の甚だしきを造作し來るや恐く三賢十聖の智通と以てするも雖も決し
 て其能造の主と認得すること能はざるへし否認得ること能はざるよ非を畢竟能造
 の主あることなきあり否なく能造の主なきよ非す實は是れ吾人一念の轉處より此
 の如きの妄境を幻出し來りて昨日の匆々馳逐の忙劇と致し今日の悠々笑語の間遊と
 成す而已古聖曰く心の萬境に隨つて轉轉する處能く實は迷あり流は隨つて性と認
 得すれり喜びもあく亦た憂もあしと今これ一念の轉處已に匆々たれり嘗て舊臘の忙
 劇は陥り一念の轉處更に悠々たれり乃ち新歲の間遊と得る生死涅槃亦た復た斯くの
 如きのみ吾人豈其一念轉處に勾て謹慎を加へざるへけんや偶々感ずる所を録して以
 て新年の詞とす

佛教の偶像教に非す

世俗は擔板漢と云ふ諺あり是の或る男が大なる板と肩よして東京銀座の通りと通行
 し乍ら此市街の立派あれとも片側町あること氣の毒あれと嘆息せしより起れる諺な
 りと云ふ銀座の町の片側に非す己れ板と肩よせし爲め他の一方と見ると能はす法
 爾本然として兩側共に存在するよ片側と認めたる僻見を笑ひしものあるべし
 方今此擔板漢が多ひに困り入る次第あり我佛教と彼の(アイドルレリジョン)偶
 像教ありと云ふ耶蘇教師やら京都大佛の首が地震を落たのと論トて自己の首の落る
 と知らざる者が衆生と濟度するとの何事ぞと書た歴史家やら木佛と打割り經卷と引
 裂ても現罰がなひから佛教の妄誕あり杯と云人の皆此擔板漢の仲間とあります依

教の偶像教に非ざることを證據立る迄のこと御座ります先年文部省より修身書編纂の
 心得書を内訓せられた時に先哲の嘉言を出すの宜ひが故人の行状と不注意に編輯す
 るの返て後進を誤るともあれば其當時に在りて美事善行ありとするも今日の不可あ
 るものあるとの趣意ありしか感服の注意あり見よ司馬温公の水瓶を割りて偉功を奏
 せしも今日の者が瓶を割りて何の功かある常磐御前の敵の清盛と枕をかいして返て
 貞操の評あれとも今時の妻君が之と學べり人何とか云へん昔の向疵と以て忠義の第
 一としたれを長崎の支那水兵事件の支那の水兵の後疵斗りて日本巡査の向疵とあ
 りしより談判の部が悪かりしに非せや時と所と機會とが肝要な孟子權道と論せるも
 茲等のとをわりやしやう依て諸君も丹霞や一休の眞似と成されていけませぬ予が
 上の如く佛教の偶像教に非せと云ふとを喋るするの畢竟語の沈意を恐れてあり今日
 は於て代書人といへば狡猾と聞へ書生といへば貧乏と聞へ難有連といへば愚昧と聞
 へ自由黨といへば保安條例云々と聞ゆるが如く歐米人の耳より「アイドルレリワロ
 ン」と云へば直に野蠻と聞ゆるの沈意あるが故よくたくしくも斯く辨せり第二

佛教の主義を多くばなせに入家九宗共に木佛畫像を用ゆるやとの疑問起るべし是の
 全く儀式に用ゆるのをありませす佛教の先づ三歸戒と云ふ式がありて佛寶法寶僧寶
 の三寶に皈依するに木佛を用ゐねば此式か整ひませぬ此の三寶の佛學上よて一
 體三寶別體三寶住持三寶と云ふ込み入たる學理と有すれとも冗長ある故略す今の
 住持三寶として木佛畫像を用ゆ此外は五念門も入用だ何よせよ主義と儀式の別
 あるものよて儀式の理論は拘へらば重く慣習に依ると云ふことと承知して貰ひたひ
 諸君の婚姻も三九度の盃と四海波靜の謠があくての儀式が整ひあひ様あるもの
 我々と偶像教だと罵詈する耶蘇教自身も洗禮の式に隨分共は馬鹿を眞似を致しま
 す耶蘇の肉だと云てパンと食ひせ基督の生血だと申して葡萄酒と吞ませるものあひ
 か故に儀式杯の御互は余り六ヶ敷云ひ方宜しかるふ然しそれも暹羅國を
 支那の野民か百尺竿頭は小兒を捧げて遂に絶命に至らしむるの神式やら西洋の黒奴
 と屠りて祖神と祭ると云ふ様な儀式あれば是非共は改めねばならぬけれども我佛教
 の法式の別は道徳は害が無いから東洋一汎の慣習は従ふも何の嫌かあらん

全體佛教よてハ木佛のみならず經文迄も敲門の瓦だ指月の指だと釋尊ハ申し置れた彼の所ハ月があるぞと指よて教ゆる月が目ハ附いたら其指に用いな門と叩いて内より返辭と致したら瓦ハ捨てよよ指と月との關係も瓦と應答の工合も面白譯トや是より其邊のとと辨しませ第三に木佛畫像ハ儀式ハ必要なるのみならず教法と弘むるも大に便利なるたへハ商法家の熟練する者ハ(ツレードマーク)商標と異様ハ製する又新聞紙の廣告も種々の意匠と凝らして他の(ケーキケヤ)氣附を取る其他看板商牌と店頭もふら下るのも皆な其職業と擴張するの方便あれば決して笑ハれぬさらばと申して酒店の杉の葉が酒もあければ赤字の(フラー)が牛肉も無ハ現品も無ハから不用かと思ひバ看板と見て現品と買ふ人がある依て現品と看板ハ二而不二だ平等に即して差別トや技が面白味ハありませ木像ハ眞佛ハ無ハ眞佛ハ無ハから不用かと云へバ佛教を流布するに付てハ入用とが多ハ抑ハ甲の思想と乙ハ通ざるにハ二つの方法カありて一ハ甲の口より語を出して乙の耳を媒として乙の心ハ入るとと二ハ甲の形容を以て乙の眼を媒として乙の心に通ざるととな

り多くの衆生の中ハ眼ハ見ゆれとも耳ハ聽ゆれとも眼ハ盲と云ふがあるされハ木佛畫像ハ雙に對して身業の說法と申しませ彌陀佛の兩脇に觀音勢至を立てたのも釋迦の左右ハ文殊普賢を安置するも獅子と白象の臺を直たも千手千眼の觀音も十一面の菩薩も皆ハ佛教の所説トハ身業譬喩に容ちつくりたものなる佛を蓮臺ハ乗せたの汚泥と出て汚泥に染まぬ君子の譬トや花實種子同時ハ成ぜる佛教の妙理と知らせたものなる此事ハ附てハ特勝な講釋があれとも他日別ハ辨せべし彼の美術博士フエチロサ氏カ繪畫共進會よて屍殿司吳道子の書た佛像と評讚した事杯を御考あされたら諸君の思ひハ半ハを過ぎんか扱終りに臨みて注意と乞ふとあり佛教ハ一體ハ相、用と三ハ區別とつける判釋あり體といハ元素元質あり相といハ出來上りたる形容あり用といハ働きあり(もちゆると訓する時ハヨウの音よてハマヲキと訓する時ハユウの音あり之ハ其品物ハ人の用ハ依て役ハ立つものよて彼れ自らの働きあきものあり故に佛教ハ人間の用ゆることを品物の方ハ轉用してハマヲキと訓せ此時ハユウの音)此扇子も元質ハ竹と紙と糊あれと

も扇子や團扇の容を造れ、其用の空氣と煽動して風を起すと云はたらきなり同トく竹と紙と糊なれとも提灯と容造れの風を起す働きの無く暗を照すの用あり此三元質と以て傘と造れ、雨と凌ぐの用のみよて廿日暗の役に立ぬ同ト山の土あれとも観音の像と三組の盃と尿管とを造り出す観音と顯れるれば何如も鹿末に取扱ふても敷臺や靴とすりの側は置れぬ置けば人が笑ふ盃とされ、酒と呑むの用あり尿管とされ、未だ一度もつかぬ買立ての品もせよ容がそれ何だから伊丹の上酒ベルモットと入れてありても飲む氣よ成れぬ同トく木切と竹輪で締めた桶あれとも天保錢の容を向の方の半分が高く出来た容なれば置圃トやから上白肥後米の飯をも箸と附る人の有るまひさんと皆さん體相用の妙を理合あものトや是れだから下駄も佛も同ト木の切と云ふ譯よの參らぬ一休上人の如く淨穢不二と悟りた人のいざ知らせ佛敎の何たると辨へき悟りも開けぬ人即ち尿管の酒あら一口呑め無ひとか一度位尿管と仕込だ器をも徳利の酒あら呑度ひと云様な迷の連中が一休の眞似を致したら大變だ木像をも畫像をも謹んで拜む方かよからし諸君の定めて配應せらるゝあらん舊自由黨

の門田某の 主上の御寫眞と破て官の追捕を受け今又於て日本よの居らぬが欠席裁判丈の出来てあります又神戸の教員某も同トく 陛下の尊影と引裂たが是の 皇室よ對す不敬の罪に問はれて現よ六年の懲役よ處せられたるに非せや此神戸の男も耶蘇敎と辨護人よ頼んだら定めて無罪放免よなゆしならんにそこよ氣の附ぬのの残念よありましたなり 詩經曰く蔽市たる甘棠の蔽る事勿れ折る事勿れ召伯の憩し所と是の支那の人民が召伯の徳を慕ひ思ふまゝ一度腰を掛られたる舊地として甘棠の樹までと愛せし徳義と孔夫子も讚嘆せられたとあります然らば佛敎の偶像と本とするもの無ひ又木像の眞佛との無ひ然れとも木佛畫像と顯へた以上の元との石をあい木を無ひから相に依て起るの用として佛門に在る人よの之と禮拜恭敬すべし世諺よ曰く鱗の頭も信心がら拜め、光明と放つと孔子曰く神を祭ると神在すか如しとあなかしこ

佛敎如何が信せん

余の今日諸君よ對して佛敎如何が信せんといふ一題と述て責を塞がんとす夫れ佛法

の大海の信を以て能入とすと云ひ信の道元功德の母とも云ひて佛教門内に入るの通券あり依て今日の諸君も通券を興へ申すほどに各々その有縁の法門に入りたまひ扱信も解信と仰信の二ありて解信の道理と學ひて而る後之と信するを云ひ仰信との唯仰いて尊信すると云ふなり今先づ仰信のと申さば我國にて大師といへば皆弘法大師と爲すが如く最も名高き彼の弘法大師の佛教の深秘を極めたまひしのみならず筆蹟に至りても今日まで大師流として傳來する位の一と云ふて二なさの名筆あり其事の大師の學法目錄の跋も益城松崎先生が野史も依て説て曰く弘仁帝嘗て一名蹟と得て甚た矜重したまひ大師も示してのたまひくこれ唐人の劇蹟あれともたゞ名氏を憐むるのみと大師曰く是れ臣僧唐の青龍寺に在て書する所ありと帝容易も服したまひて大師曰く軸尾合縫の處も臣僧が落款あらん帝發きて之を視たまふも果して然り因て問てのたまはく師が今日の書と此と絶異あるもの何ぞや大師曰く書は其土の宜しき所も従ふされば本朝も歸りての當に今日の如くあるべきありと帝の寶翰固より超倫毎も大師と相下らざりしも此れより聖心遂も折けたまふ然れば即ち大師の

方外の士と雖も其聰明傑特一世の英雄あり其往て彼土も學ぶや又た適く貞元元和の際なれば幸ひ韓公退之に逢ひて其論を上下せば孔子の道も傳へ來れるや必せり然るも惜哉此道器もありながら空しく佛教の異端翰墨の末枝と傳ふるも止まるの實も大日本生民の不幸なりと云ふせり余曰く松崎先生として大師も逢ひしめば大師が汝が儒道を以て矜らんとあらば先づ我が著のせる三教旨歸と見よとのたまふあらん而して松崎先生一たび三教旨歸と見られお忽ち出家して大師の御弟子とあるの必せり然らばして儒道如きも止まりて佛法の味ひと嘗めざりしは嘗も本人の不幸のみならず實も今日三千九百有餘萬人民の大不幸ありと然れどもこれ俗にいひゆる我田も氷を引くの嫌ひあれば一先づ取消とせん
本朝もて學といへば先づ菅江兩家と稱す菅公の佛教と信トたまひしこと今更云ふやるもあければ略しかきて江家といひ匡房卿の儒學のみあらば八幡太郎義家に兵法と授けられしを見れば實も文武兩道の大家にして續本朝往生傳と編述せられ自ら序して予近ころ感ずる所ありて之と記して諸々の結縁も備ふと云ひ又功德の池遠し

と雖も賢と見て齊じからんことを思ひ生死の山高しと雖も誓を待みて越あらん。と欲す。と云ふとの誓との恐らくの彌陀の本願なるべし。是の如く大家にして既に佛法と信トたまふ又彼の排佛家にて有名ある韓退之の生質至りて正直者よして孔子の道を弘めんとを己が任とする人なり。然るに孔子病の重りし時子路が禱らんと請ひしに丘が禱ること久矣とのたまひて禱ることを許さざりしその道と弘むる韓退之のありあがら自身が潮州へ謫せらるゝ時舟の將に覆へらんとするに臨みて自ら禱りたることなきの俗よ所謂つらひ時の神頼みと一般なり。己よ潮州よ到りて外に友とすべき者もあく無聊よ苦しむところに幸ひ僧大顛ある者來りて公の痛く佛法と排斥する由なるが先づ公が自ら任ざる所の孔孟の治國平天下の道の廢れたるを興し又文章と以て一世に鳴る者なり。然るに彼の羅什三藏の文と公か文との就れか勝れたりとせん退之答へて羅什の文に及ばざること遠しと然らば彼の太宗皇帝の天下を治めたまふの功績よの云何曰く奈何ぞ及ぶべきと此時大顛口を極めて罵りて曰く汝が長所たる文の羅什よ及ばせ世と治むることの太宗皇帝よ若かせ然るは羅什の太宗皇帝の追慕する所

太宗皇帝の深く佛法よ歸して藏經の序とよて書きたまひたり文章治世共に汝より超勝せる皇帝羅什の共よ尊信したまふところの佛法と苟且よも謗ると云ふは實よ己が分を顧みざる者ありと斯く韓退之の及ばざることの及ばせと答ふる所實に正直ある者あり然るに余又試みよ退之に代りて大顛よ答へば曰く世を治むるの皇帝よ及ばせ文章の羅什よ劣ると雖も排佛の技倆に至りての古今我よ及ぶ者あしと謂んのみ併し乍らこれ等の言の今の信の目的にあらざれば代りて答へざるも可あるとあり此程余が塾の書生どもか寄集りて談話すると聞くは校長の深く佛法を信ざる由あるが全體其佛法の根本たる天竺の如何ある開化の土地なるかと不審するとき他の一書生曰く天竺の世界開化の元祖とも云ふべき地あらん何とされば往時の亞歷山王の各國を蠶食し盡して尙此外よ取るべき國あるやあきやと云ひて取るべき國と探索せしむるは最早外よ取るべきの國なしとの答へを聞て大は歎息涕泣したりと傳ふる程の大功を樹たる人あれとアレスタレスが天竺の學問を西洋よ傳へたるの亞歷山王の功よ勝るゝこと百倍とも稱することあれは天竺の頗る開化の國ありしとの疑ふべか

ら其國より起りたるこの佛法あれば義理亦高尚あるものあらんと云ひ居たり而して此アレスタテレスが天竺の學と傳へたるの佛入滅より一千年も後のとなり元來釋迦如來の馬鹿者ばかりの世界へ出現したまひたるよめらるる金七十論を見れば已に九十六種の外道ありてそれく宗義と立て居たりとすれば其門流即ち弟子たる者の幾千万人ありしを知らる其外道と相手は演説も説教もしたまひて彼等か宗義と難破し盡して凱歌と奏して而る後説き出したまひたるが大小乗の佛説あり豈よ之と野蠻未開の世に默示や想像より起りたる宗教と同視して可あらんや又此佛説と相承する龍樹馬鳴天親等の菩薩聖衆の世の常ならぬ智慧才學と備へたまひたる者のみあれば之が教を垂れたまひたる釋迦如來のいよく超絶常倫の御方あるの必定あり扱斯く説き來れば諸君の既に仰信の目的即ち弘法大師菅公江家支那まで羅什三藏太宗皇帝印度まで開化の最盛なる時より方りて諸論を壓倒して説れたる佛法あれば必らず尊高の宗教なることを領解したるとあらんが亦た間釋迦や菩薩と云ひる者が今日末代の吾人を誑惑するよめらるるか疑ふ者もあらんか是こそ抱腹絶倒す

べきの愚昧の考へと聞かざるべからず先づ世の中の金満家と看よ貧窮人と説かして金錢と奪ひんと欲する者ありや定めて之あがるべし然ると貧乏人が金特を見て彼ハ我等が金錢を奪ふあらんかと恐れ憚る者あらんや之と何とか名けん維新の始め戸籍調の時邊鄙の者の狼狽して説をなして曰く此人名を調べ戸毎に番號と附する此の番號と以て富と擽きてそれに當りた女の皆外國人を取り去らるゝありと蓬頭垢面の田舎女と洋人が取て何とか爲ん前の疑ひと懐く者の殆んど此の田舎娘の心配は類するあり釋迦如來の智慧龍樹天親等の高德にして我等凡夫と誑惑して何の利益ありとせん佛の己は王位と國とを捐て山に入りて難行苦行したまふ何を自己の利益を求めたまふことあらんや唯是れ憐愍衆生の大慈悲の己むと得ざるに出たまひたる八万四千の御説あり諸君請ふ之と疑ふことを止めよ

次は解信と云ひ道理を解して然らば信すべきの法ありとして之を信すると云あり世間の人瀕瀕自痴にあらざるよりの因果の理を解せるあらん即ち働けば賃金と得働がされば賃金と得勤むれば富貴とあり惰れば貧賤とあることを佛法の元來非式あり

道善ありと主とさすものよらざるを世人誤りて葬式追善と以て佛法とすれども死
 した後の葬式追善の宛かも牢へ入りたる者の爲に差入物と爲すが如く十の牡丹餅
 の本人に僅かに一つ届くか届かぬ位のものなれば盗人去りて繩を縛ふが如し依て
 人牢せぬ前も悪事を慎まざればあるべからせ今日の現在世を看よ有財家の割烹店
 よ晝食を命ぜると得るも貧者の漸く梅干香の物まで濟すよあらせや今日の因薄きも
 のの未來の莫美ならせ今日の善多きもの來世の好菓を得るハ猶今生の貧富貴賤を
 以て過去世の善惡二因を判知するが如きあり故よ今日より未來の惡菓と招がざる機
 の計と爲さるべからざるなり過去世の因異なるが故よこそ貧富貴賤智愚好醜の別
 あり甚だしき人並あらぬ不器量者もあり而して天道を咎むることもあらせ仮令亦
 天道と尤むるとも天道若し口あらば其差別こそ汝等が自作あり我の關せぞ皆佛の説
 く處の因果の理なりと答へられんと必せり依て未來大福長者とあるも貧窮下劣とな
 るも今日各自の自由勝手あり左れば佛教よて談ざる處の自由ハ十方三世又通するの
 自由あり自由中の最大自由よて世界の一小部分たる日本に居て自由黨本部の看板

を掛けて大威張とやらかし巡査と拘引されて罰金と科せらるゝが如き小なき話に
 あらせ苦の何よ依て得るかを觀せば則ち迷の作業より來ることを知る來世の苦を免が
 れんと欲せば今生の惡業を廢せせんべあるべからせ故に先づ惡と廢して善を修する
 が解信の初めよて漸次ハ四諦十二因縁等と觀つて遂よ見思二惑と斷つ盡すの工夫と
 屬せざらんべあるべからせ

如此解信との道理と辨へて信せるとあり然るに世間一般の人ハ何れより來ると
 知らせ又何れよ去ることをも知らせ實よ空しく寂く夢の浮世と云ふも尤もなるとあり夢
 あるが故よその始めを知らせその終りを知らせ夢の覺た處を始めて何時も睡りよ就
 き何頃夢と見始めたと云ふとが分る其夢にも八万四千あれば覺し方よも八万四千あ
 り熟睡せし武夫の容易も眼と醒すものに任らざれども武具を鳴らせバ忽ち眼を覺し
 酒醉の頭よ灸をするても知らざれども爛冷の徳利もふればまだあるかと起き上る
 が如く夫々に醒し方あり八万四千の覺し方と一と陳るとの容易あらざる故略して
 其中の四種と擧げば世に賢くて貧乏の者あり阿房にて金持の者ありまた賢くて而も

金持あり阿房の上よ貧乏の者あり近き譬と以て之をいへば茲に人ありて道具屋へ日
 は一圓づゝの金を送り菓子屋へ一日に一厘づゝの銀を送り三十日積りた處を道具屋
 よりハ立派の重箱と購ふたれども菓子屋へ行き此器に菓子と入れてくれよと云ふに
 菓子屋ハとても三錢の此方の菓子ハつめられぬ故隣りの焼芋と御求もあるべしと
 云ふが如く重箱の身軀ハ三十圓の因に由て出来たる故立派なれども焼芋の智識ハ三
 錢の業より來りしものなれば格別珍重すべきものに非ず貧乏も多病も前世の業因よ
 由れば人よ對して家の貧しきと歎き軀の弱きを陳るハ我耻と言ひ觸す道理あり
 併し是ざるのとい追ふべからず是より後の未來の大事ハ今日の心一つよて如何様よ
 もあるべし是れ即ち佛法の道理よしてまた法の眞理あり然るよ世の儒者ハ韓退之氣
 取にて佛法と誇るを以て豪傑の如く思ひ我國よ於て久しく上等社會の佛法と信せざ
 りしハ儒者の所爲なりしが近年ハ其儒教も衰へて往時江戸の昌平校の孔子の像と拜
 禮するよハ一疊二疊を争ひしものあるよ今日の其像の削と土足ぬよハ通りながら
 見物するよの出來る様よあり去るころも或る儒者が官員とあり洋服と着け帽と頂き

て孔子の像と見て居られしが何故ハ帽を脱がぬかと想像するよ儒ハ陳腐なものと思
 へ他人ハ儒者と見らるゝことと厭ふてのとあるべし左すれば儒者の振らざるハ儒者
 自ら儒者視せらるゝと耻る一點よても最早儒教ハ佛法の敵手よハあらざるあり此頃
 よ及び次第よ哲學が流行するよより學者も佛教と贊成し此程も船中よて洋學生の話
 しを聞くよ三世因果の説ハ中よ高尚なり宗教の中よてハ佛教が第一ありと云ふもの
 あり衆論の此點よ向ひしハ全く洋學の御陰あり併しあがら辨天(吉祥天)にハ黒耳天
 がつさよのなれば結構ある洋學よ何を附いてハ來らざるや是まざるの敵手の儒者よハ
 兵力ハ勿論儒者貧乏と云ふて金力もあく殊よ衰態と極めたれば怖るゝよ足らざりし
 も今度新たに設けたる敵手よハ金力もあり又時としてハ兵力もありそらあれば獨り
 僧侶諸君よのみに任せて置いてハ甚だ覺束めし三千九百万の人よが一致して此の佛教
 を信トてハ如何

明治二十二年一月十三日出版御用

発行所

福島同和會發行

福島市

本町四丁目

福島同和會發行所

福島縣福島町九丁目廿九番地

印刷所 竹内活版所

